

ブラジルの変容（2004年－2013年）

－その背景と展望－

西 岡 勝 樹

はじめに

筆者は2004年～2013年までブラジルに駐在した。この10年間にブラジルは大きな変化を遂げたと言われるが、なぜ、どのように変化したのであろうか。本稿ではその大きな変化を、政治、経済、生活、社会の各分野に着目して解明する。

1. ブラジルの変化の内容（2004年－2013年）

(1) 政治面の変化

2004年のブラジル大統領はルーラ氏だった。2002年10月に4度目の大統領選挙に当選した労働者党初の大統領である。彼は北東部出身で貧しい家庭に育ち、労働運動に身を投じた。そして、全国労働組合委員長にまで登り詰め、遂に大統領になった人物である。ブラジルをこの10年の経済成長の波に乗せた最大の功労者である。そのカリスマ性は群を抜いており、大統領職を退いた今でも国民から絶大な支持を受けている。

2013年のブラジル大統領はジウマ氏であった。彼女は2期8年務めたルーラ大統領を引き継ぐ形でブラジル政治史上初めて就任した女性大統領である。現役大統領として2014年10月の大統領選で2期目の当選を果たし、ルーラ大統領の経済成長路線を引き継いだ。しかし、現在その成長の歪に直面しており、彼女の手腕に期待がかかっている。

(2) 経済面の変化

経済の面では大きく変化したと言える。2004年の名目GDPの総額は1兆9,415億レアルであった。それが、2013年にはその総額が4兆8,448億レアルに伸びている（図1）。実に2.5倍の伸び率になっている。この名目GDPは国内総生産と言い、その国の1年間における生産量を表す。また1年間の経済の規模をも表す。この名目GDPの総額が2004年から2013年の10年間で2.5倍に増えたことを表している。さらに、この2013年のGDPの総額の規模は現在世界第7位の規模である。ブラジルの経済規模の変化が、いかに大きかったかが分かる。

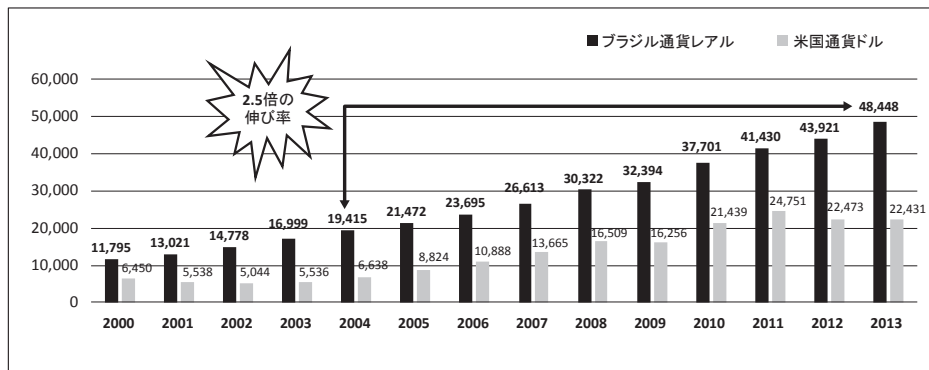


図1. 名目 GDP 総額の推移 (単位：億レアル / 億ドル)

出所：Banco Central do Brasil, Indicadores Economicos Consolidados, Produto Interno Bruto e taxas médias de crescimento,
<http://www.bcb.gov.br/?INDECO>

次に、一人当たりのGDP額についてもみたい。名目GDPの総額を人口で割り算したものである。2004年はUS\$3,628.98であったが、2013年ではUS\$11,157.76となった。実に3.07倍である。

もう一つの指標として、外貨準備高を例に挙げてみる。2004年の外貨準備高は529億ドルだった。それが、2013年には3,758億ドルになった（図2）。これは驚くべきことに、7.10倍にも跳ね上がった。家庭の家計に例えると、この10年間で一人当たりの収入が3.07倍に増えた。さらにはその外貨建ての貯金額が、実に7.10倍に増えたことになる。

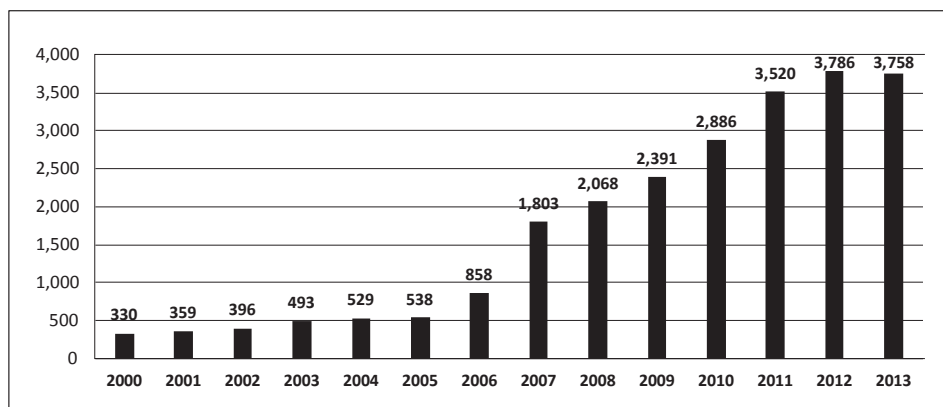


図2. 外貨準備残高 (億ドル)

出所：Banco Central do Brasil, Série Histórica do Demonstrativo de Variação das Reservas Internacionais.
<http://www.bcb.gov.br/?RED-SERIERIH>

(3) 生活面の変化

この10年間で最も大きな変化は生活面でみられた。生活に欠かせない食料品、日用品の値段の上がり方は尋常ではなかった。2003年末のインフレ率を100とした場合、2004年から2013年の10年間のインフレ率を累積した結果、2013年末の数値は171.11となった（図3）。

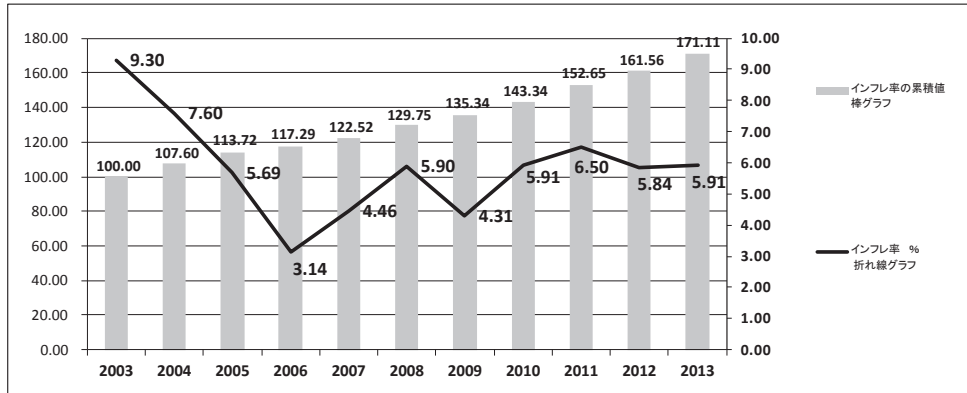


図3. インフレ率（%）とインフレ率の累積値

出所：Banco Central do Brasil, Histórico de Metas para a Inflação no Brasil.

<http://www.bcb.gov.br>

注：インフレ率の累積値は2003年末を100とし、各年のインフレ率を乗じたものを累積して筆者にて算出したもの。

次に、為替の面でも大きな変化があった。図4は、グラフの線が下に向かうほど、ブラジル通貨レアルがドルに対して価値が高くなることを表す（レアル高）。また、上に向かうほど、レアルの価値が下がることを表す（レアル安）。つまり、このグラフの急こう配の軌道はブラジル通貨レアルがいかに変動の激しい通貨であったかの証明である。

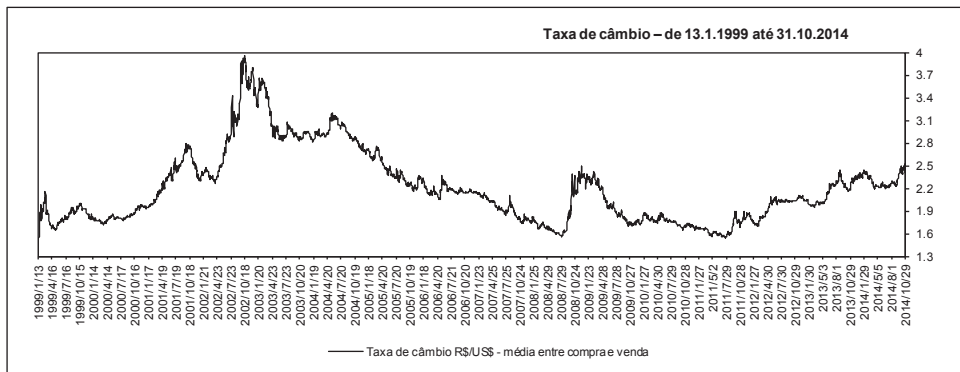


図4. ブラジル通貨レアルの対ドル為替の推移（1999.1.13-2014.10.31）

出所：Banco Central do Brasil, Indicadores Economicos Consolidados. Taxa de câmbio nominal e índices de taxas reais de câmbio (IPCA e IPA-DI), <http://www.bcb.gov.br/?INDECO>

ブラジルのインフレ率の上昇と通貨レアルの乱高下の様子をみた。この10年間の実生活にどのような変化があったのだろうか。実生活を推し量るために、世界でも物価の基準になる公共交通の運賃、特に地下鉄の初乗り運賃を調べてみた。2004年のサンパウロ市地下鉄の初乗り運賃は1.90レアルであった。それが2013年には3.00レアルになった。実に値上がり率は1.58倍で

ある。2013年6月にブラジルでは、デモが頻発した。その原因となったのが、この地下鉄運賃の値上げであった。つまり、その運賃の3.00レアルから3.20レアルの値上げが、結果的に、政権をも揺るがすデモ・暴動にまで発展した。値上げ幅はわずかに20センチボ（約10円）であったにも関わらずである。

もう一つ公共交通手段として、庶民の足であるタクシーの初乗り運賃を調べてみる。2004年の初乗り運賃が3.20レアルであった。それが、2013年は4.10レアルとなった。値上げ倍率は1.28倍である。

二つの公共交通運賃の値上げをみてきた。公共交通機関であるため、急激な値上げはインフレを引き起こす。それゆえ、政府にとっては大幅な値上げに慎重であった。地下鉄は州の管轄、バスは市の管轄であった為、地下鉄やバス料金の値上げは、時の州知事や市長の裁量で見送られた年もあった。

次に物価の値上がりを実感できる庶民の一般的な食べ物であるパステウ（Pastel）についてみてみよう。パステウは小麦の生地ミンチ肉やチーズをつつみ油で揚げたギョーザに似たスナックである。このパステウ一個の値段が2004年は1.75レアルであったが、2013年には3.50レアルとなり2倍に値上がりした。

筆者が住んでいたサンパウロ市はブラジル経済の中心であり、多くの日系企業が本社を置いている。日本人駐在員は、昼食によく日本食レストランを利用する。その昼食の定食の値段を調べてみると、2004年には24レアルであったと記憶しているが、2013年には同じ定食が40レアルと1.67倍になっている。ここで、為替の影響も考えてみることにする。2004年と2013年のレアルと円の為替については、2004年は1レアルが35.06円のレアル安であった。しかし、2013年は1レアルが49.36円となっており、レアル高であった。この換算レートをつかうと定食の値段は2004年が841円、2013年が1,974円となる。つまり、価格は2.35倍に上昇している。日本人から見るとインフレと為替のダブルパンチを受けた感覚であろう。

(4) 社会面の変化

社会面の変化で一番実感することは、自動車台数の増加である。サンパウロ市やリオデジャネイロ市のような大都市では、自動車台数の増加による交通渋滞が今や社会問題となっている。2004年のブラジルにおける自動車販売台数158万台であったが、2013年は377万台と2.39倍に増加した。ブラジルの自動車販売台数は世界第4位である。交通渋滞がもたらす弊害は、インフラの未整備とともに現政府にとって最大の課題である。

携帯電話の台数も驚異的な増加を示している。2004年には6,560万台であったものが、2013年には2億7,100万台と4.13倍になった。ブラジルの人口は約2億40万人なのでほぼ全ての人が携帯電話を持っていることになる。

2. ブラジルの変化要因（2004年－2013年）

（1）政治面の変化要因

ルーラ大統領の登場が、ブラジルの劇的な変化の鍵である。彼は自らの貧しい境遇を糧に、ブラジル国民が貧しい生活から脱却することを最重要課題とした。彼は政策のスローガンに「飢餓ゼロ（Fome Zero）」を掲げた。ルーラ政権を引き継いだ現ジウマ政権も「貧困の無いブラジル（Brasil sem Miséria）」と言う貧困プログラムに真剣に取り組んでいる。

（2）経済面の変化要因

ブラジルの変わった原因を、経済面に求めるなら、次の二つを挙げることができる。その一つは、BRICsという言葉が生み出されたことと関係がある。BRICsとは、ブラジル・ロシア・インド・中国の新興国のことである。これらの国々は、今後、50年に渡り世界をリードする国として挙げられた。その一角にブラジルの名前が登場したことに大きな意味を持った。このことがブラジルに大いなる自信を与えた。2013年にGDPの規模が世界第7位になったことはその証左である。こうした自信から、日本・ドイツ・インドとともにG4と称し、国連常任理事国に立候補して、その座をねらっている。また、南アフリカを加えた新生BRICS会議を毎年開催し、世界のひのき舞台に躍り出ようとしている。

その二つ目は、ブラジルが世界経済の波に乗ったことである。新興国の経済発展が著しく、特に中国経済の伸長は、ブラジル経済の成長にも大きく貢献した。中国への鉄鉱石・大豆・鶏肉等の輸出が、ブラジル経済に与えた貢献は計り知れないものであった。

（3）生活面の変化要因

生活面での変化要因はインフレにあった。ブラジルは過去、ハイパーインフレの時代を経験した。物価の値上がりが凄まじく、年間のインフレ率は2,400%を超えるほどであった。当時は値段が上がるのは当たり前であり、国民は自分たちではどうしようもない、受け入れざるを得ない現象としてとらえ、価格に関する感覚が麻痺していた。そして、1994年リアルプランは成功する。あれから十数年が経ちハイパーインフレは過去の産物になり、ブラジル国民はもうインフレは起こらないと信じた。しかし、そうではなかった。インフレはじわりじわりと、ボクシングに例えるなら、ボディーブローのようにブラジル国民の生活に大きな影響を与えた。

（4）社会面の変化要因

ブラジル社会をこの10年で大きく変えた社会政策が二つある。一番大きな影響を与えたのが、ルーラ政権が行ったボルサファミリア（Bolsa Família）である。これは一種の条件付現金給付プログラムである。このような制度自体は、世界中で何らかの形で実施されている。ブラジルにおいても、ルーラ以前の政権でも実施された政策であった。それではなぜルーラ政権の政策が注目されるのか。それは、今までの制度を効率的に一つに纏めたこととその規模にある。恩恵を受けている国民は4千万人以上にもなる。世界でも例を見ない大きな規模である。制度的

には、受益者に対して厳しい登録義務があり、給付システムも整備されている。また、給付条件も厳しくチェックする監視システムも整っている。2004年から始まったこの制度は、2013年で10年目を迎えた。この制度は国民の貧困層からの底上げや、その貧困層の社会生活への参画に大いに貢献した。

もう一つの政策として、最低賃金（Salário Mínimo）の3倍化計画がある。ルーラ大統領時代の2004年の最低賃金は260レアルであった。ルーラ大統領は労働者の権利と生活を守ることを最重要政策とした。そのため、この最低賃金の3倍化政策は大きな意味を持った。そして、この政策を引き継いだジウマ政権の2013年には、最低賃金は678レアルにまで上昇した。実に2.6倍の伸びである。この二つの社会施策がブラジル社会に大きく貢献し、社会の変化の基礎となった。

3. ブラジルの変化の結果 ～新中間層の出現～

このように2004年から2013年の10年でブラジルは大きな変化を遂げたルーラ政権とそれに続くジウマ政権、この二つの政権の下で、貧困層の底上げ対策と所得倍增計画の政策が実施された。さらに、ブラジルは世界経済の波に乗った。その結果、Cクラス（Classe C）とよばれる、従来の中間層よりさらに大きく成長した新中間層が現れた。

2004年には、Cクラス（Classe C）の人口が約7,260万人であったが、2013年には1億1,810万人にも達した（図5）。実に国民の60%がCクラス、つまり新中間層として大きな勢力となった。新中間層は、この国の購買力の増加に大きく貢献した。そして、この10年のブラジル経済の伸びの基礎となっていた個人消費の伸びに大きく貢献することになった。このCクラスの出現が、ブラジル経済成長の原動力となった。

4. ブラジルの変化に対する国民の不満

ブラジルは本当に変わったのだろうか？もし良い方向に変わったのなら、2013年6月に地下鉄運賃値上げに端を発したデモ・暴動は起らなかったのではないだろうか。ブラジルはこの10年で著しい経済成長を経験した。そして、国は大きく変化し豊かになった。新中間層が国民の60%以上にも達し、その豊かさはブラジルの多くの国民に行き届いている様にも見えた。しかし、5,500万人にも及ぶDEクラス（Classe DE）の貧困層も未だに存在する（図5）。

ワールドカップの前哨戦であるコンフェデ杯の最中にも、デモが起こった。そのデモはブラジル社会の矛盾を世界に向けてさらけ出した。ブラジル国民はコパ（ワールドカップ）よりも医療・教育・治安の改善を訴えるプラカードを掲げた。そして、無駄使いと汚職の追放を要求した。この6月デモ・暴動が起るまで、過去20年近くこのようなデモは起こらなかった。それでは、今回なぜ起こったのだろうか。それは、大きく成長した新中間層が、政治への不信から堪忍袋の緒が切れたとばかりに大きな声を上げたといえる。彼らが今度は社会不満の発言力となったのである。

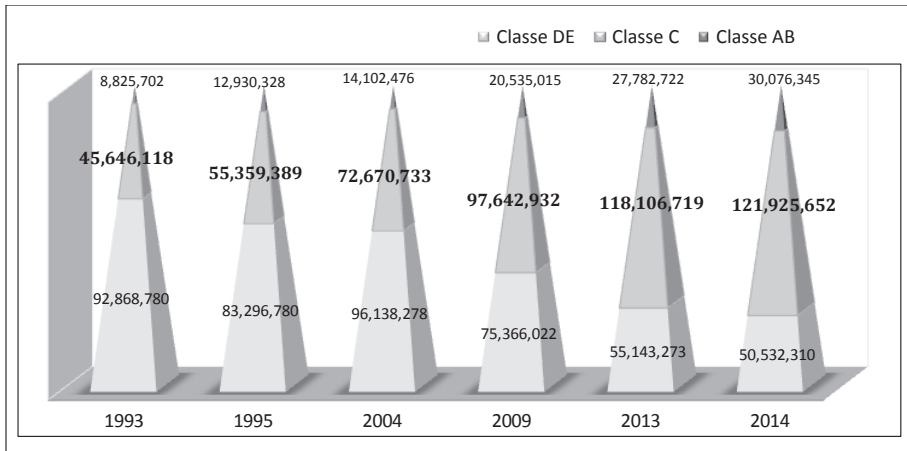


図5. ブラジル社会階層ピラミッド（単位：人口）

出所：Centro de políticas Sociais, Fundação Getúlio Vargas, *De Volta ao País do Futuro: Projeções, Crise Européia e a Nova Classe Média*, Marcelo Cortes Neri., 6 de março de 2012. pp 51-52
もとに筆者作成。

注：2004, 2009, 2013, 2014 の数値は総人口を比例率をもとに筆者にて計算した推定値。

おわりに ～ブラジルの将来展望～

2014年から2023年のブラジルの次の10年は一体どうなるのだろうか。2014年のブラジルには大きなイベントが二つあった。6月に開催されたワールドカップサッカー大会と10月の大統領選挙である。

この大統領選挙は次のブラジルの10年の行方を占う大きなターニングポイントであった。近年まれにみる接戦となり、結果現大統領のジウマ氏が当選した。多くの事業家、特にサンパウロ州やリオデジャネイロ州の企業家は対抗馬であったネーベス氏を支持した。ネーベス氏にブラジルの財政改革を期待したからである。

しかし、ブラジル国民はジウマ氏を選んだ。落選の危機を感じた与党労働者党は貧困層に絶大な人気を誇るルーラ前大統領をジウマ候補の応援に駆り出した。この結果、貧困層の多いブラジル北部・北東部を中心に票を集め、10月26日の決選投票で、51.64%の得票率で勝利した。ネーベス氏の得票率は48.36%であり、その差はわずか3.28%であった。これによりジウマ大統領は2015年1月1日からの二期目の政権運営を担うことになった。しかし、この選挙結果からもわかるように国民の半数はジウマ氏へ反対票を投じた。さらに棄権と白票の合計率が22.81%にも達した¹。これは今後の政権運営に大きな足かせとなるかもしれない。

ブラジルが本当に世界経済の一角を担い、国民が真に豊かになるためには、今までのようなその場限りの政策だけでは乗り切れない。社会構造を根底からかえる構造改革を為し得ることが必要である。

ブラジルの次の10年（2014-2023）を展望するには、2015年からの4年間で彼女がどのような社会改革を成し遂げていくかがその試金石となるだろう。ブラジル国民はその成果を注意深く

見守っていく必要がある。時には再び民主主義のルールに則って、改革要求の行進を起こすべきかもしれない。

〈註〉

- 1 （出所：ブラジル高等選挙裁判所

<http://www.tse.jus.br/eleicoes/estatisticas/estatisticas-eleitorais-2014-resultado>

2014年10月27日閲覧)

(にしおか かつき 本講座受講生)